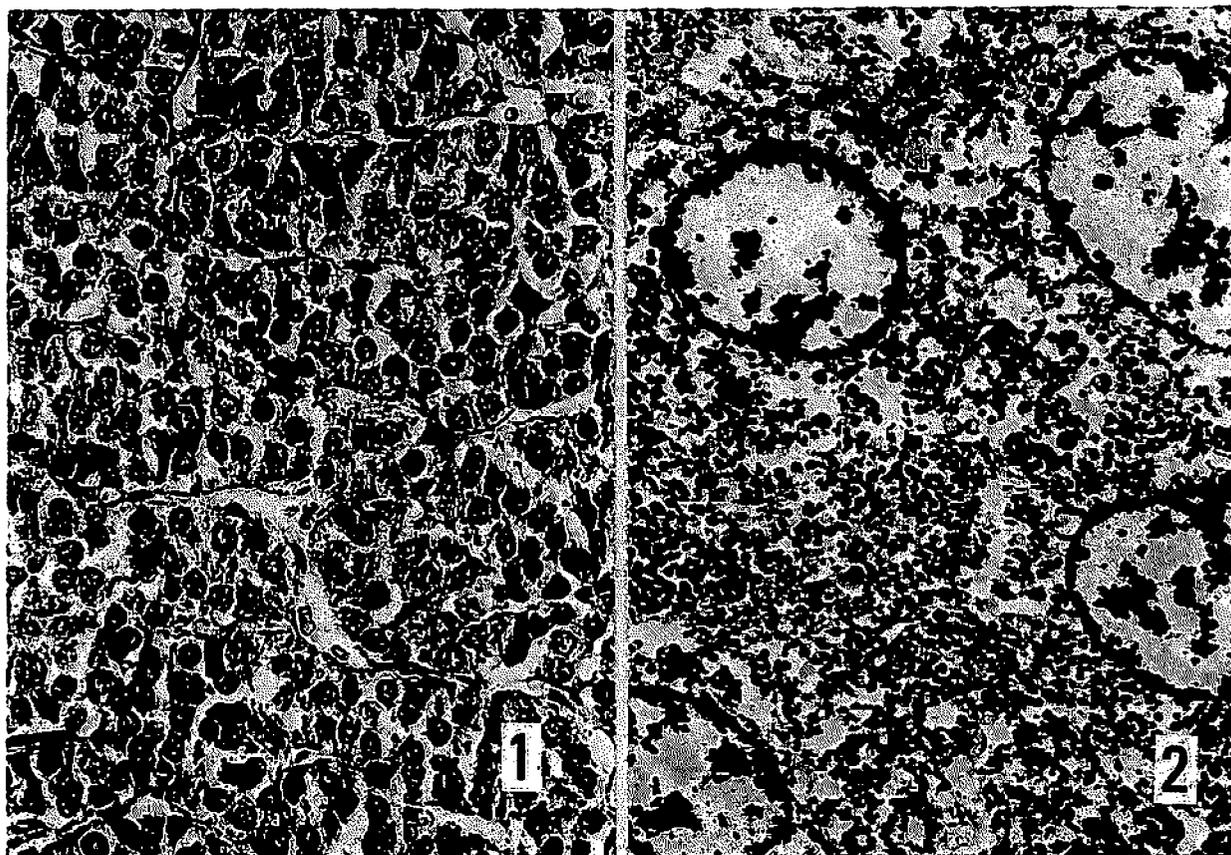


イヌの心臓

東京大学農学部家畜病理学教室出題

第20回獣医病理学研修会標本No.335



動物：イヌ、ボクサー、8才、♂

臨床所見：53年12月から削瘦が目立ち、フィラリア症と診断された。X線検査では心嚢水の増量が疑われ、血液検査ではALP が37.5KUと高値を示し、また排尿障害もみられた。利尿剤・強心剤の投与により一時症状の改善がみられたが、その後再び胸水の貯留が顕著となり、初診以来約4ヶ月後斃死した。

肉眼所見：胸腔内、心嚢内に血様液の貯留がみられ、心冠部、大動脈・肺動脈基部に小豆大～ソフトボール大の腫瘤形成があり、また同様の腫瘤は縦隔膜リンパ節、横隔膜、胸壁、肺にも認められた。さらに腹腔においても小腸漿膜面、腸間膜リンパ節、大網、腎門部および腎皮質、前立腺にも同様の腫瘤が認められた。肝は腫大し、小葉の一部は黄白色を呈する以外他臓器には著変はなかった。

組織学的所見：腫瘍細胞は明るい円形～卵円形核を有し、淡明な好酸性細胞質をもつ細胞が巣状に集ぞく、あるいは索状に配列し、細胞間の境界は不明瞭であった。核が濃染する細胞も少数混在していた。これら腫瘍細胞はchromaffin 染色陰性で、まれに分裂像を示した。各

腫瘍細胞巣間には毛細血管が豊富で、その周囲には嗜銀線維が発達するが、腫瘍細胞巣内までは入り込んではいなかった(写真1, H・E)。電顕観察では、腫瘍細胞細胞質内に電子密度の高い顆粒が豊富に証明され、他の細胞小器官が目立たなかった。顆粒は径0.2～0.6 μ で、限界膜を有するものもあり、特に細胞質辺縁に密に集まる傾向があった(写真2, $\times 5000$)。

腫瘍細胞の強い増生は心外膜下から筋線維間に及び、腎では皮質での腫瘍細胞の増生により、一部尿細管上皮、糸球体の圧迫萎縮、消失像もみられ、脾、前立腺でも同様な実質細胞の圧迫萎縮像がみられた。肝では類洞うっ血が強く、一部肝細胞の脂肪変性がみられた。その他の臓器では著変なかった。

診断：腫瘍細胞の増殖は心冠部、大動脈・肺動脈基部でaortic body の位置に一致して最も顕著で、電顕像を含む特徴的な細胞形態およびその配列、豊富な毛細血管、嗜銀線維の構築様式、さらに老齢ボクサー犬に高率に発生することが報告されていること、などから「aortic body tumor」と診断された。